

心だのこる挙式

ふたりは5年ほど前に同じ職場で知り合い、上司や同僚たちに内緒で同棲生活を送りようになった。

彼の仕事は、ブライダル・ディレクター。彼女は、ベテランのサービス・スタッフで、結婚歴があり子供がふたりいます。

4人は実の夫婦・親子のように仲睦まじく暮らしていました。

ところが3年前の夏、体調不良で検診を受けた彼女にガンが見つかり、即刻、手術を受けて闘病生活に入りました。が、いったん病魔に冒された彼女の身体は、日々、衰弱していきました。

病床にある彼女に、彼は入籍を求め、ふたりは2年前の5月に入籍、事実上の夫婦になりました。

それから1年、妻の病状は一進一退でしたが、桜が咲き始めた頃に病状が悪化して、担当医から「余命1ヵ月」と宣告されたのです。

兄とも慕う会社の社長にこのことを話すと、社長は、

「仕事のことは気にせず、看病に専念なさい」

その計らいによって、彼は、妻に付き切りで看病することになりました。

献身的な彼の看病が神に通じたのでしょうか。妻の容態は、落ち着きを見せてきたのです。

そこで彼は、

「自分たちは、入籍はしたが結婚式をしていない。彼女に花嫁衣裳を着せてあげなければ！」

病床挙式を計画したのです。

式の日取りは5月26日。前代未聞のこの計画を病院にお願いすると、看護師長はしばらく考えてから「私もその挙式に列席させてください」と温かい理解を示してくれたのです。

早速、準備にとりかかりました。挙式のスタイルは、「シビルウエディング」で行うことになり、式を司るミニスターは私が務めることになりました。

限られたスペースの病室ですが、お花も、写真撮影も、ウエディング・ケーキも、BGMも、



▲花婿は感情が高まり涙にむせぶ

余命いくばくの妻に「花嫁衣裳を着せたい」と病床挙式行う

そして、花嫁衣裳も、すべて通常の結婚式と同じようにそろえることになりました……花嫁衣裳は、彼の職場の人たち全員がお祝いとしてプレゼントすることになりました。

準備が整い、最終打合わせを5月24日の夕刻に彼の職場で始めました。その時、病院から、「血圧が下がりました。緊急事態です」の連絡が入ったのです。

彼は急いで病院に戻りましたが、医師の判断は、

「今夜がヤマ」でした。

私たちは予定を繰り上げ、そ

の晩に挙式を行うことを決め準備に奔走、夜10時より、親族・友人・ふたりの同僚たち16名が参集して、医師、看護師立会のもとで挙式を始めました。

花嫁は、勿論、酸素マスクを付け昏睡状態でした。ドレスは布団の上に掛け、式服に身を包んだ花婿は花

嫁の手をしっかりと握りながら「誓いの言葉」を述べました。

それに対する答えは、娘が代返しました。続いて花婿が結婚指輪を花嫁の左手薬指にはめながら、

「僕は君のことえを心から愛しています。これまで正式にプロポーズしませんでした。どうか僕と結婚して……」

そこまで言ったところで、こらえていた感情を抑えることができなくなった花婿は、言葉を失い、ただ涙にむせぶだけでした。

大粒の涙が花嫁の顔に落ち、



シビルウエディング
湯川理明氏

(ゆかわ りあき) (有)アニバーサリー所属 1947年静岡県生まれ。2007年 シビルウエディング・ミニスターの資格を取得。

花婿はその涙を拭いながら愛と誓いのキスのプレゼントをしました。

眼は閉じ、口も鼻もマスクで覆われている花嫁ですが、唯一開いている“耳”には、花婿の切なる思いを告げる言葉が確実に届いたことと思います。

「誓約書」のサインは、母親に代わって息子が代筆し、そこでミニスターの私が結婚成立宣言を述べて、ふたりは名実ともに夫婦になりました。

私の祝詞は、「百年恋する結婚」と題したもので、「どうぞ笑顔の年輪を重ねながら之から先もずっと幸せでありますように」と祈念しました。

式は滞りなく終わり、私が帰宅して午前1時を回った頃、花婿の訃報が入ったのでございます。